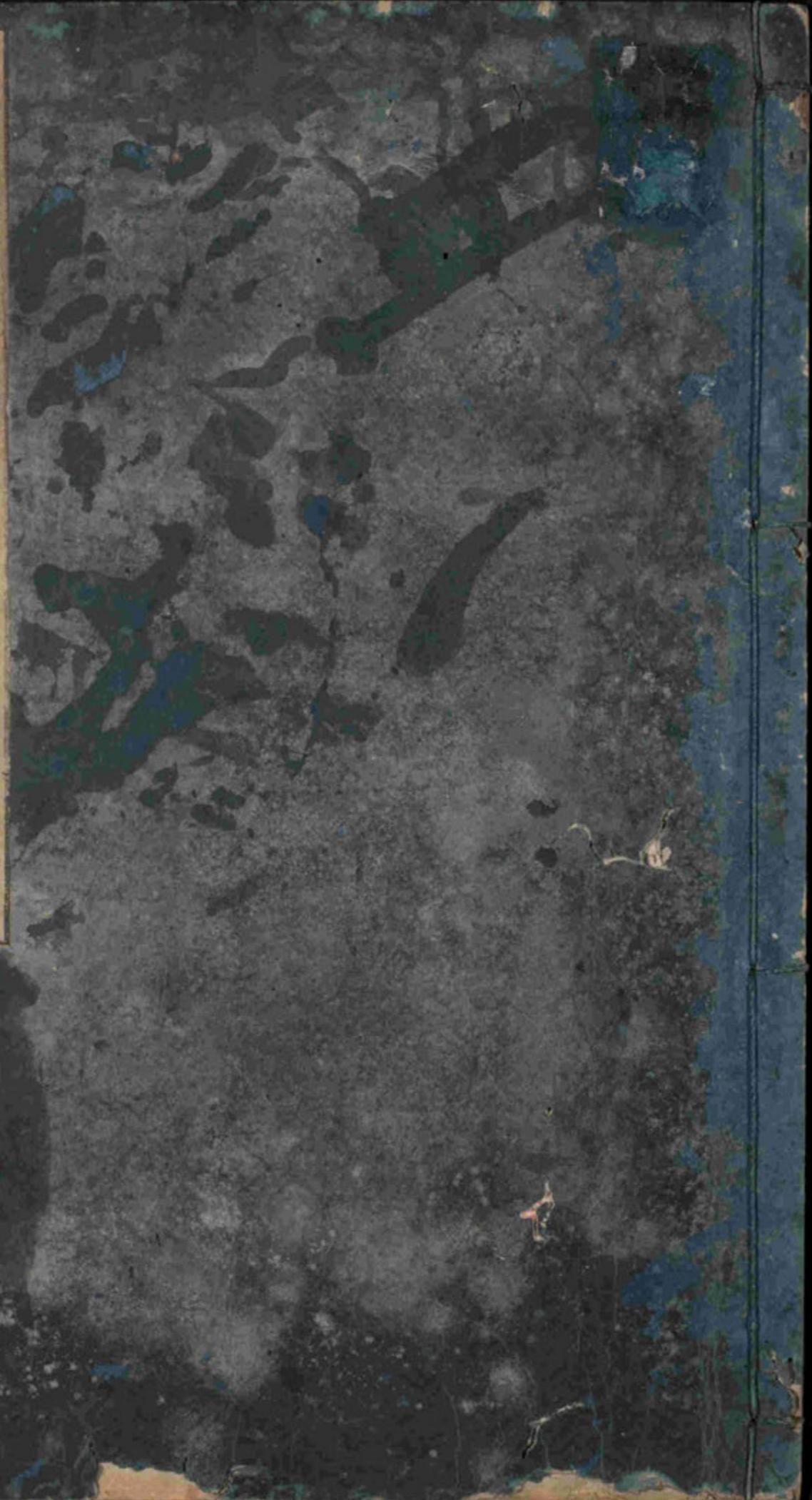


二
金
華
西
游



左大將家六百番歌合卷第二回錄

夏

薊樹

夏草

賀年歌

交夜

鵝鴨

夜夜

蟬 廂

夕歌

晚立



左大將家六百番致合卷之二

夏

一番

薺樹

左

持

弘昭

右山よりみよび下りたる木立葉れ秋をさすりハあき

右

海信朝臣

西教寺所あひ秋乃は來そてうそともふなり御うそへそり

右方やへえ左哥崇徳院の御製文月とじ秋をゆめりて

あき山御製ひに事一也

左方陳云あきほと似うそせひれりも

右方云石序題とほきのとよともみりとひよ
をこれ様すちゆ又うとももとまとうをねうちふなくや

判云勝山北南浦森り緑うをむと向斜かして安勝劣
可る指矣

二番

左 胜

至高の旨

危きこれらもこそアラクモ夏木立綠も春ばかりなりぬ

右

経家つ

夏夜うともととなりつゝ、是てねうとりアレヌアリツメ
右方ア云前番の以汰可モ經若ウのたすも春とものぬひや
左方陳云まに乃新ニテ林すミナリミヒツヒスモモモモモ
タヌムシモヒツヒズモヒツヒズモヒツヒズモヒツヒズモヒツヒズモ

死方ト云モ耶ぬふ番

判云左より上句を夏木立竹と不可度量ゆとみくわむもの

なぐり人れ下句を似宜ぬ左方新樹とも不賞して秋うみ
のアヘンリロキサウ一きいのうひなくやセツヒヨリ
ムシ不色乃詞ハラクテ左勝よんてし

三番

左 指

季健つ

えりへぬよもひそちくをぢつおとみくらをねよううさらる

右

信五

あくもすんせとぞもくして叶とれもの足跡奇ぬすみて

左方ア云左井至巨病

左方ア云り翠てしれせりひ志りひ志りひ志りぬとみてとみてと

頗似化鄙

判云左是巨病之由左方ア云り右モ龍符之右之上

てのひよりとを持としとくや

四番

左

定家翁

陰ひを水りへえうみどりびらうとれ本家のひり五毛て

右

勝

中宮宿大丈

とよひて三とりうみあれあね山ソウレリたの持きそん

右かやえひたととよ字不共心

左陳云就漫南山とソふじれ

左方や云るね山ソウモソウ行かゆり又お政に
争ふまゝを先ソウラズそれからりとよ争れひと
うちせつてさうとめくほとくもひのく

陳云さうとの事を近御のすり

判云左夷浸就南山と文集ゆるめまとあひうす
志計て不可度あれ右ノ奇をとく山函とふりにまれ
山子である以重ノ教政以奇ハは羽の事ア又政経の

争ふるを右勝玉て約すん

又番

左

勝

兼家朝臣

我身との庭ソウムを敵よさればひのものけやそふじ

右

家澄

桑少人（シナノヒト）（シナノヒト）
右かよ云々と云ひあひとふりて右儀よちかくや
陳云さうくとよじを常ノうせ

左方ヤ云右あをね野種

判云厄の庭とうくろくの詞不可及承れりのひろ葉ふせ
そばゆの事ふをあまと不可度めやわいろともねと
せりんじよひまとせくあらうしてせけめきせらる
ゆふをりくほともなづかひらあつておれりへ
くよゆもやたむすりて勝ゆる

六番

左

女房

老をぬつふりひてり人まごん月すよりぬ庭の木ま)

太

勝

深草

春のうきせ人のあさどみ種し縁を度とせこすせ成り
たふを立派之四ヤ

判云うのぬ首が詞させ優ノルと老人まごんといひるや

七番

左

夏草

すやしにたぬ根よるうん右やみくわハ年とれなど

りへはすやくまきくへくや

勝

魚家翁

捨人や夏草れふことかくさんもけのれせめみじめくます

右

種家つ

夏草のうけひとりをうてとりくあくもつを地うわれり

右方ヤ一云無精

左あゆえりにとりくや云又字不ね叶

判云左寄因叶を強ひ雖不可度其殊取やすのひへー左

寄あふびりと數だらてぬまと一事一不足りをし

左勝ゆるる

八毒

左勝

季經つ

往りぬぢの壁のまへ重未だありのうふをゆるナドモリ置
右 中宮權大丈
夏莫スノ野クハ乃ぬむ即く後をそりとゆるかう人ふニア
左ルホ不取ト
判云左ゆるす人此氣乞ひるを既とナシテモモタリの
マシん達フリアヒリムシテモナヘリヨリテヤ得ラル
ムヒキ除しつゝ承とりやうコトはアソト即く後へ
士子の詞よりトア詞アツアムれてしなどももも其ままで
ヘヌマヤルラル

九番

左

弘昭

ちうきの跡鷗のえれハ猶あるてかてアエケル難れ事のモ重
左勝 家隆

キナミ聖とがいわきとリ深草の里ハ鷗れすりぬももも
右方ヤ一云たて拂歌

左本下云かつりくりとてアリテ後接ウアシ似もも
なて事ゆ

陳玄祐と乍りてきまとらんといひれも納とゆえたまに
もじうれかよして晏りと後トナセ

判云左云地アスノ萩代のモミヤリリモ初ゆ只野
十鴻り鳴とけづりもうとヨトアリぬアミモ初レ夏莫
のヤソケムモ重レテすゆ左ホモモモトナリ

をうへようへとてよらむに在る勝

十番

左

至高胡辰

ふつまてう野中のつたをあままた窓とらてうち行ひ下葉

右 脇

隱信朝辰

わの處その蓬代庭をかげぬ一徑ふすとのうちもつゝもん

右方ヤトキ至高胡辰

龙方ヤ云ううもうふこつぶこして庭ゆもしく

判云左石函首が詞を優すゆり側左を燕またれといひ

聖中の唐を扶きてえなどこうあきまさうしと紫鈴又偏
けく小野亭と名してすめうじやうすやめうじ右を必め床め
らうひうさせ蓬庭を拂う事取扱ううれしとゆ

十一番

左

持

至高胡辰

かう山の葉あれとあうらうまゆる春み小松人しひすそ
みちもなき憂れくまのまうりをあうりくかとくいふ

右

深蓬

右方ヤ云野と玉て山げりもせうらりん夏まよそいづ
大あもひとひき

龙方至殊ヤ一鳥

判云左を聖城とみて山乃こそとよめつて右方新ヤ一ウ
右方ヤ又山家ふと紙をきそ野毫荒よきりふとだりん系も
つく野亭ふくそ秋の色じうゆうめ極極など右はりうじ

あをつやととさくやゆう車たを野原とみて山とより
ときふ又とたくひち持かとくよつきよ

十一轍

左

女房

夏菜のりとしほとみを以テがもりうへとはかすなり
右 腹 信

夏くわのりとしほとみを以テがもりうへとはかすなり
右赤ヤエニアドリ上ともはそのふすまノリ
右ホト云ふすいぬときた所

判云厄寄一あしり上をといへぬそにとれり 乞う佑達
十一上向ハヤモツムぬといるるいともひ是られぬやうに
是るふすき詠詞よりとひめれむすずそ勝船へくや

十三番

賀美家

左 胸

李經つ

きふすろ外のあそみてもとや月乃いみのうてあよま

右

信

りくそ又空茂の川波うちつる野々豊野アヤリあとよふづ
右方ヤーニアシテモトモトヨリモトヨリモトヨリモ
神ノ直をあがつまよ

陳云祭日利生可異化時ぬ山神行難之主

左赤ア云右お上とを済事トシテ見下さん豊野事とよむ

じとたひらも又豊野トヤギリヘルヒトヨ

判云豊野主風日紳ナヘテシヨリ一右今日本空

とととととあひの豊野トナヘモヘモをそひのゆすま

あつまやまさしくや

十四番

左 15

弘昭

おうりえを詠ふておうすめひをく乗せりうと
左 信定

ひりうちのまえよかきうて今日そ涼さむのいに
右方殊不取ヤ

左カヤーえ右奇うつまれひくや又つりまのえを
詠まことくヤーを女院ともりまの院とこそヤー

はれりく

判玄たぶんけつひせ小もじりととそえと詠せふといひ

十三のきのまよせきうめてなどいゆるひあれりく

角と右方人院とくヤーとと歌ヤーう身みもりく

院とそヤーとま詠え女院せ内親王やまとヤーさん不及

詠え西阿美かわら奇くもりのまのまひだひねよそと

後てるのう又女林院とせ詠翁り御禮あも選子内親王

やめヤーうちふよりきの文音くもがすだまへぐも

やうやくあまきの番およびて

十五番

左

五家朝臣

流までせのたぬそりくくねひらくれよばは浪

右

勝

家隆

あひま秋の支へけそくてのもうふわすゑを哉の川水

あかせ不取

判云厄か又をかづくもの勝劣りくをすしゆ事でひ
左の波は波とづくれうちそのどうか波は波の川みハ
すらうきりにてまきかへくやるう

十六番

左 持

氣家朝臣

まききつことをふくそ思ひ一ふたとわてもみくわづふれ
右

寝室

ちもやあうが後りさあまれ蔓草ひみくきても波う今日見
たかよきと次ノ事にそんに様よナあい
厄方。一云左寄上もこれか。ゆうひら。す
判云左寄上ひと次よきりともすくを只つとどりも
思ふよ先とわてばくとへるうぢて右すゆき役ハ

十七番

左 胎

女房

左寄上ひと次よきりともせうつが茂の川波
右
竿あざきのみあきよあひまづくほきのうとも思ふ
右方や一え波うつぶりてえうる様子とこあ

危あやえ上匂つゝしつゝぬうへかづかうとも

とそ思ふといへん事うりくや

判云たすみをまくう

十八番

左

吉家朝臣

主の上をせうは乃とほつゝむづふ日うけかつきを今日外

右 胜

中宮持大丈

申にすまづけてそれじまづあひぬえをあせり思へる
右方珠玉やる

左あやてえもわれまつてを頗可き無別此船同日よりせ
判云危舟むづふ日うけよほどいへど思とくわなまみと
平舟ゆゑと右舟と歴そりひりうれさうやうふゆるや
みちまは一あ日えれまかをされとすうれと今日本祭乃
まのすかるまほに事にあす右勝よろうん

十九番

鶴は

十七右 持

季健つ

回船とめがねあゆとや太井川とこそてやうぬづくましの新

廿一右

達家つ

檜川くよともやうぬ船引のきよひもやめゆこありへ
た右せ不承

判云西首にあゆこそよ不可度量之因所也勝劣せり致ア

廿番

五歳翁

右

勝

隱信朝臣

ぬすへたり船川くようれしき大よゆまほれうひ舟引
アモアシモアシモアシモアシモアシモアシモアシ
判云危舟もくせりうそくアモアシモアシモアシモアシ

ゆくまひゆすまゐるよらおほほよゑとすといひる

うへえふひまきもん

廿一

左

宦游湖上

うちこちらかひのやくもうひみをもとぞれくつりのま

卷六

一月

卷之三

右方ヤニ之右角垂楊輕
右方アニヤニヒテアシイハ流優シトテアシ

判云左の三と光代の火の報しゆきてむきあひ候く
すがよ右のやうす治川久ゆかやうのを殊よう見み
ゆりむ勝つる

廿二番

左
腰

卷之三

うすきの新すみや
坂の女のもととよもよ
ひの舟

家燈

大物にいきせぬ不運はうつ
志あやこ左衛門と一失

龙方中云西日本山とありといひ事ハモダ不相叶又う

判云危きを石の力人すと失と申してゆめりくふ事危き

取手の事より知れりと申す所の如き

氣をぬけり山もぬけり橋もぬけり水もぬけり
ね川の水もひきはくとひくすそほれはくひく
ぬくせぬまくとくぬくまんまくにようあされ

ぬるゝ事か不主とせゆうすを心疑ひ得て
たゞと失らくあすめあらばと申

サニ番

左 指

女房

大井川 だ山すふうかひみとひすりの根もみ月流れ

右 中宮燈大丈

アツリハ七瀬のうとと鈎舟くぐりもとてぬぬみの根そ
なむや一云日英アラトヒテ事あすや

陳云月夜ともいへとも山陰などにてそにふあわゆせ
左あやさ七瀬のうと根うひみとけりちまつ

判云天そか人の旅陳よ船をもてぬやう右たびく根のうと
とうつひ舟とてりうを迺くややはつまぬぬみの根そ

サ四番

左 胜

駕船

右 左
根川左又月えゆくし御工しめやうくものととくつとをもや
寝茎

お鈎舟たゞせうすと千種ばれやひととく運びうとて次の新
左方ヤ一云左舟すようと
左あやさ火ひひとりくらくあすひよ

判云根川あらそいせとくとくいぢんせひひて
ほのうひをうこれらんくすのうりもたゞせさし
こさんねやうもくろすしとーた舟すようと
さぬをぬまと上下せやうすりひせうすもゆるを

かともぬにてをかどり勝負うちらんともよ

サヌ番 夏夜

左 拍 李經つ

ほくをやくの事あり思ハキ一書ふうもうの夏夜故に
右 謂信あは

邦云々一「急」の事もまづ「急」を教ひあくちうすれ
右ノトテ夏夜を教わりたれ様子ほくとさのむりひ
ほくを愈へともぞそ

陳云「事」の事も夏夜うつとももつるんすを
かきうけりもひげくあゆん

厄ヤ云ふとえ天邪ふ比「ことなし」を殊以祿邪天御夜明
ひとゆくもすあえ

判云「番」をかのあ人疑陳よ又字にてゆうりおぢてし
サヌ番

左 勝

弘照

かのうを馬うり後うめやくぬむ乃承定「相なり」を

右

健義朝臣

夏夜をかの水鶴の「急」ふくみ往なくぬうあく乃ばれや
右ノトテ「急」よりと云ふ文字のひつす又多うりぬも

事なしぬあくらむ

陳云「急」のゆりあく「急」もとまく又りくや又月乃
えみ一の極せりひてよゆの下ゆもをれするそえれ俊小

じうきこゑ走右寄相除之ゆ

判云「急」を老の称是そ思ひぢくれゆり右ノトマキツカル

サセ毒

左

五氣朝臣

タモトミ称互へもつゝぬうすと稱の互と拂してぬれは行め

左 胜

家詮

毛じはまの芝をあとさゆきもまくらひひづるの代をく
采不取

判云右爰と乃てより人ねありそつとよろしくをあえ
向上のタすくと称互へりとよじ事を尚速と不可兼劣
よや右上下せ慢義アリミシ尚勝とぞし

サハ番

左 胜

兼ふ朝臣

爰の板を拂りほとやぢの板らもくれまくとてぬ取原因

右 胜

中宮宿大丈

爰ぬとされこめにまほやと又しまようすとめ爰は東か
在かアエナリリヒラヒといひよよくや

左方ヤアエナリヒラヒ

判云左人争とちよより一也取アトク左の争がこれ
内くやきぬうじぬ爰のほとそぬとくれぬもあれ
ウニシモなくせぬすへたうつえにしう併めれ

サハ番

左 胜

女承

うすのゆめ拂り主にアシムナリ山町も一ノ木れそく

右

深蓮

是の山那ふうつとも称の拂がそくアケル志れくめ

右方下云々頗宜矣

厄方下云々くもうめ

判云厄守右方人下る已證氣志の詞也山上雖不可及方右
頗少ト云て、より一考トやゆうをむ可る様也

一番

厄

勝

夏衣胡臣

サツの役をかほもみ代えき拵ひ下ふ役者もうとく移の夏

右

信定

夏の役代りすよもいけり那ム子さうぬま見工ぬ既志のつ

右方ヤエ志ホリうえ拵さむりぬへ事トモヤ

た方ヤエ夏れりのねわもいきとリヘ此ぬ行餘るリモヤ
判云厄又右方人下まきりもきぬしてどを興云々

一番

左

勝

夏衣

駆船

テシカタスムシムサシラク夏衣たりとて、之を拵ひ下て、是を

右

信定

夏衣シシヘギルも中くにウケテ、まきぬうとくつまき
右方ヤエシムを左がトモハ

右方ヤエ申ヒミヒ又あつさのみうとモヒ事ヒモ

判云厄守右方人下らうといをうと夏衣をひと人勝と
りひだりたまは右方人下るといへぬなりて、右方

もとのうかやうにきじあれよな承をあいさの
うとあらんあへひ事ことへまよあす只中くふと
りひあくさうなどいへるやうをあらすそげあそと
きあまとあらうとくすをゆる以れる勝

二番

左持

道家朝臣

ゆゑの魚し蝶の母衣あはままでがふるむけ夏八月二日

左

深達

橋の小ほひもぬつむつらとをゆへ往つゆきひうめりん
かかやト云あはきもつぶ成りりすひゆ

左方下云上う橋とりひトイだととまわらば承うけ
とりてひすう同事うきまや

判之左のソラふ成ゆくそひをうすやねつま右莞ゆくあひ
うめりんくを衣つゝまこゝふすと思ふぬうや爰良
所要を橋乃々ひうづくミーとつやれつえ事ことよもたれ
うけまもつくおまやるつま

三番

左勝

李澄つ

争ふも思ひとてをぶら安うタクの行少そありきる
右

経家

打まえうとれひようかうとされ徒涼まつりょうまつをもゆのね

右方下云左莞夏夜せうもとだく様小よ

陳えしよと是乃き様ととう讀うううこれ

左かでやう

判文右乃はゆきかく神をといひそとすよりをたすやを

雨さりるる

四番

左 勝

女房

つきはとも涼しきなり衣うそま枝うそとれ月うけ

右 あやめの花もいぢめ家邊

寝見るかみのなきたりとゆもなとうそによう風を吹き
たおせ不承ヤ

判云左手上下相應してたゞ見ゆしゆび可み勝

又番

左 勝

立家翁

ゑひだの葉づけのゆきうてあすゝもの波を夏うわを

右

中宮擅大丈

荒の父かねをつゝみ一抱ばれせひとくもたもとほひ母衣

四番

判云元々さててもゆうきのうの年れ神のき御御

なれやなどり人れをかひまよ似もてておととくや

六番

左 勝

五五五朝臣

たらむれの匂とゆけらひそひそするふつ色と秋またさらも

右

隱信朝臣

おちりきぬうちむれう風にてゆひとの草蝶のねじらむ

右あやめを殊類

左方一合荒たらむてつ變すみてといひあらめり

又せみの母衣かくふせまうやうり
判云厄るよし人を殺すれどもようしくすゆ可る勝

七番

府

左

女房

シナリモ夏のゆきと雪、せんじ松風乃はるのゆき

右 股

信定

タニシレバモ扇のつ吹ふく秋を立げのれ
かかやて夏扇左之間樓新之

左方アミ立たじといへれりふきともりふりくや
陳玄因秋小うきてつよ常ハ事ヤ班鳴裁羽とも化まリ
判云左のくわい秋はひもいへるもきそ在れ此秋をといへば

まきつゝゆらん

八番

左 持

兼ふ朝臣

三れののてる日もゆつてすくぬまゝの風。なづきと

右

経家

すくぬまゝの風もうう御そねそきもやかよそをひじ

右ヤアミた守似無

左アミカアミとまんす似無

判云左おひ扇左のまちやせり。此向後之事ト見

九番

左 股

信昭

タニレキアミの風にてなして月の夜もすくしきと夕

右

中宮燈大丈

夏代より月をへゆる日くらひよけりあま坂にとふけう
右方ヤ一云月端ほどを必要のえ候アリサシモ
左方ヤルは山をとりふすりし外事お事
判云左哥日出うも涼しう所て山はとあつうもん非
とも謂ル右の哥比那云月山より連れものか
無別事も必モ外トとあるをつをやく一たす
すアリそまきつとゆりすん

千 番

厄 ぬ

立家翁

ち

煙活効

雪の冬にすむを覺きぬうひやさりつきの風ノ秋ノうもげふ

左方ヤ一云あづまの姿にて月と秋のあづまと思ふ事

うづま

判云左方せたつ見うもゆめれ勝劣なりのむくし

十一 番

左

勝

定家朗

因からふうふきたねれゆうまれてまつてばれりう闇の月新
左

亂活

うちもらふ扇のはれ縫うまうりむりひこめうれ新れまうれ

厄ふせ不西えのゆ

判云左の風を詩ゆり寄ふも絶漢すまを仰きと殊不可
度矣よや左うちもらふうま思ひこめうれ新せ不其い

又事不ふぬ國の内などまさかへまつや

十二番

左 勝

季達つ

神のうち小雪をかくあく扇うらまく出でてぬ月とぞえ

右

深茎

うみそもおほへんとあるもやあきうねの年とぞだりける
かかよひ可新ヤー之事

左方ヤーニ右か頗宜九

判云左奇文左ひりひりとよろしく居て左奇きの
左今のおきの内乃居どもハされうち我よよくをよげに
服かんとよう後てゆめ起てよあはれをとね風の年とぞ
かときだる様小うみしめ左の方人を左すようと

十番 判ナトヨテゆめ起て左勝ゑくやゆうん

十一番

夕歌

左

勝

女房

山のつえ袖の日新りのみしてあまそうれ竟のタス
わてようみくろきだしたかよひもとく先のひろそりとぞ
左あやま父教くを玉されとも頬ひつすうふや

左エ右奇偏アリ源氏物語もろと思へれる奇合
之燈事め行

判云左奇のじよ出よもゆ只夕歌ひされとぞりとてなど
まれりゆふりほとせりんれみうこきもむのあくびて
珍めいもんとよ右ひとく源氏物語もろと又

處候すもされまきうちられや免ゆゆうかよ

おまきをゆりさんべへんゆきこもおせりあひ

十五番

左

おまやうの人のもとく山うつよりはじふゆうりの荒

右 脇

信玄

寺のたのびく是もて住者ともてふを抱きゆりゆりのぬ
おかよみのじふきく

左方よみもておまく又

判云の西首身の勝劣もゆるがこれ又まきうそ

信玄

十六番

左 挑

季澄つ

蚊毛虫の煙りふせぬもの書よもくおぬねをゆくせりの巻

右

信玄

煙毛虫の煙りふせぬもの書よもくおぬねをゆくせりの巻

右あ不取や

左方よみえい不取とお耳うづめ

判云をくあぬふうをあせむ不宜挑とまくし

十六番

左 挑

定家判

きうみてまの紫毛人く風ひるよ頃秋常くゑゆふりの毛

右

信玄

日教あら雲よお通しひらしてゆふすりさける志げ行ひ

右カナト云多うのではのまかをきくにす

左カナト云行場力ゆふうたよとくまやうにきこゆ

判云くれうめ因のぬぢばりすとを左カナトゆめ連と殊よ

すふく紀詞ともそぢらん雪よどやけとそと不せけ

千よやゆうしづつとぬよもつおねす／＼にうちをす

ちやけねとみてやゆるも

十七番

左 持

旅船

右

深草

山づれ聲のほどやえのぬうじかとひき緒よりりのぬ
なあや／＼うてどもゆくとぞめしやくびせりよ

陳ふくじもトヤセ左方承郎ヤト
判云西首／＼そくひを勝劣れり／＼とくみてわづふてよ
相持シハサギの元興の狂やも頗事一不足りるよやぬとエ

十八番

左 持

至高朝廷

右

陰信朝臣

たそんれかまつひてさるだの名成を左方人やとくあくとん
右あゆえつみゆのまんゆといしんまつゆ／＼とくあくとん
左方ト云をあんすきのゆもとゆく新をゆふのりの
事ともくしすや

判云たけ／＼水のゆりのゆもとゆくとくとくといしんの詞

不可無事丸石舟、どちらと人の手舟やられすよ春去
きとりへアゆふづくさううまれて源氏さんあ町向
きぬ船とみそどらうへんとそりそぞりとほめす
みてつれとうしゆふ、ほどりせいをなう又ひの事
みもうす而よ今ひそひとく小源氏と思ひてすあ里
不可旅源氏れるわあくうるるへー側左のまもへて
旅勝と定ひ、右船はとくやひのいこりりこまほひ
十九番 晩立

十九番 左 股 女舟

八日也と山のまゝ晴り、夕立のうちにまく
右 寝室

前川の流れてまくまくまくまくまくまくまくまく
左 持 定義船

因ひふ引の下をさうぢまくまくまくまくまくまく
右 右 家治

夏の日を下りまじよいとふらむくとくきりの夕立のや
右舟や、えん舟、毛殊類

左方下をふすまくまくまくまくまくまくまくまく
判云右舟、まくまくまくまくまくまくまくまく
如絶うづくふせ舟、また事ですくまく涼——
くもだ半舟の勝劣りますや

サ一 嘉

左 胜

季瓊つ

右下の物は未滅多くめどまく行りて鳴ぬゆかられを
右

後活朝臣

又左の行しを志すとトアツれぬあわすしみやああれ隊

左あヤーえ物アキヅクハまの。やうかへ

陳云曰事せさまのわ遠アホモ

左方ヤー云又左アメモシ御樹院

判云左下勺左上勺をトアツと詔ますすも行進を左れ

左表ノミヒテ左くをとしんれですアムナリてそ字をゆる

サ二 番

左 胜

五家朝臣

又左の左に代れうちほひきそのえもて在る行方もく下

右

経家

左も御ひぞりよしもゆか左にアシラム黒と玉をしよう

右左下空左寄一無歌

左方ヤー云アツシラム書行不外の事

右判云のさもれあら游の白ふようしくをしゆりける勝

サ三 番

左

兼家朝臣

又左をかうとみしもれよろじふりとほんを計して

左

中宮燈大ま

もつを山夕日をさせときうるやううの里をゆふうちれを

左右をも下るすよ

判云古の伏見までゆふたちの多く優秀うやうゆめれむ
このつらとまくし

サ四番

左

駕船

たる舟をねりまふとくほきてへ日にもひくゆふ立乃そ

せき右 胜

信玄

あまもややん里をまひて山すりゆふ立とすまのひくなら
右方トニエナリとくほくとを曰す

左あ不取ヤト

信玄

判云左寄えひりとみのとうべとをくらと左寄にま
もやせとりひじねくまつておれりくちをそ松村
左もみのりくわしゆをむじ勝とす

サ五番

蟬

左 胜

定家朝臣

鶴のよ成

霞ゆく拂ひあつふはせみの狀とちのとそくアハクナリ
セキ右

信玄

志をもひふりとさを案比下すとあひゆくほんをよゆつりぬ
右方トニエナリとくほく事ひす

左方ヤエアハヌと案と思ふるをす

判云休ととしだをよほりりといひを優かうすまし

る連ふばかりとまもみうちをのぞきとんする木とみるつま

「り秋のえひをはなる」て「四下されあうき」と云はれ
乃文字アリハナリや信玄うちくゆうる左勝と可ヤ取

サ六番

左

卷之三

判云虎のねりをつせきぬことにすすりをひりやそをもえ
尚速と必ずしもよほりもやもあがへうん行ひ等は候の
事うをふううううしてひととてそふと候うさりけりゆ
おのたれ本主又おううぬうもふとれりううむとく
かうるとなとま波うとタト山ふとくとまことゆるだ

廿九毒

左 勝

兼家朝臣

爰山のねり行うくなくせこそやこしらううすりるをけり

右

兼家澄

私ちれれかへこすとふゆあもて下乗ようられせみの詳く

右あや云虎奇正歌

た方下云せうの内うらうう登被れあがわ

判云左尋別登被れう只因の本すゑれ候ともあらうくや
とて下乗よううつまく今柔かううめれ左尋優う
るまく勝ともえし

虎番

左 勝

女房

叫せみのとれとくあうう狀けて本院第一えタくえのう

深蓮

夏涼き社のこすれみてよき状とかうむそみの詳うれ

右たと不妙ヤ

判云盡れこすとのせうみてよりねとうなじうて事

ほりひもうりゆくや左尋もれとくあよ狀けてぞ
りくれお詫殊をじうれしよも得うれむ可る勝

左大將家六百番秋合意キニ終

兵士の死傷者を算定する

死傷者

軍士

死傷者を算定する

死傷者

軍士

死傷者を算定する

死傷者

軍士

死傷者を算定する

死傷者

軍士

110X
355
8